

雪の上の舞踏

小川未明

青空文庫

はるか北きたの方ほうの島しまで、夏なつのあいだ、働はたらいていました人々ひとびとは、だんだん寒さむくなったので、南みなみのあたかな方ほうへ、ひきあげなければなりませんでした。

「お別わかれに、みんな集あつまって、たのしく一晩ひとばんおくりましょう。」と、それらの人々ひとたちは、話はなしあいました。

丘おかの上うえに、一つの小屋こやがあります。それには、赤あかい窓まどがついていました。ある晩ばんのこと、彼かれらは、そこへ集あつまりました。そこで、男おとこも女おんなもまじつて食しょく卓たくについたのです。食しょく卓たくの上うえには、いろいろのくだものや、魚さかなや、鳥とりや、獣けだもの物の肉にくなどがならべられ、また、色いろのかわつた酒さけが、めいめいの前まえにおいてあつたコップに、そそがれていました。

このかんばしいおいは、小屋こやの窓まどから外そとへながれてたのです。島しまにすんでいたきつねは、このにおいをかいで、たまらなくなりました。そして、どこからながれてくるのだらうと思おもつて、さがしにきました。

きつねは、小屋こやの中で、人間にんげんたちが、たのしそうにごちそうを食たべているのをながめました。外そとは、暗くらくなつて、夕ゆふやけは、わずかに森もりの頭あたまにのこっているばかりです。これにひきかえて、へやのうちは昼間ひるまのように明るあかかった。

「人間は、ああして、たのしそうに暮らしているが、私たちは、いつも、おなじくらし
でつまらない。」と、きつねは、思つて、こちらの木の下に立つて、ひらかれた窓から見
える中のようすに見とれていたのです。

そのうちに、食事をおわたたとみえて、みんなは、食卓からはなれて、歌をうた
い、楽器をならして、ダンスをはじめました。中にも、女たちは、美しかった。みんなが、
いちばんいい着物をきて、持つているだけの指輪をはめてきたからです。そして、男も、
女も、調子をとつて、おもしろそうにおどつたのでした。指輪についている宝石から
は、青い光や、金色の光が、女たちのからだを動かし、手をふるたびにひらめいたので
した。

「まあ、なんとという美しいことだろう。」と、きつねは、感心してながめていました。
がんらい、道化者のきつねは、いつしか、見ているうちに、自分までうかれごちにな
つて、みような腰つきをしておどりましたのでした。

その晩は、おそくまで、小屋の中は、にぎやかだつたのです……。しかし、いまは、寒
い、寒い、冬でありました。白く、雪は、島の上をうずめていました。あの人たちは、い
まどこにいるか、おそらく、来年の春になつて、島の雪がとける時分、やってくるとき

のことなどを考えていると思われたのでした。

はげしく風が、雪の上を吹くばかりで、あたりは、しんとしていました。きつねは思い出したように、ためいきをついて、

「ああ、つまらない。」といって、空をあおぎました。いつしか、日は暮れてしまつて、星がきらきらと輝いていました。

「なにが、そんなにつまらない。」と、星がいました。その大きな星は、北海の空の王さまだったのです。

「お星さま、私は、さびしいのです。いつか、人間たちが、おどつたように、私も、おどつてさわいでみたいのです。」
と、きつねは、答えた。

星は、黒い海や、寒さのためにふるえている森や、窓が閉まって、人の住んでいない小屋などを見下ろしながら、うなずきました。

「おまえのいうのは、もつともだ。おどつたら、いいだろう。」と、星は、いいました。
「お星さま、いくら、私がおどりたいと思つても、ひとりではつまらのうございます。」
「それはそうだ。ほかに、仲間があるにちがいない。森へいって、ふくろうに相談し

てみるがいい。」と、星は、いいました。

きつねは、森の中へゆきました。ふくろうは、たいくつそうに、体をふくらまして、口のうちでぶつぶついついていました。きつねは、そのことを相談しました。すると、ふくろうは、目をまるくして、

「それは、いい考えですね。私も、たいくつで困っていたところですよ。私は唄をうたいましょう。」といいました。

「だれか、楽器をひくものはないかしらん。」と、きつねは、考えました。

すると、ふくろうは、

「それは、風のおばあさんにかぎりますよ。さつき、破れた手風琴をさげて、あちらへゆくのを見ました。」といった。

そこで、ふくろうときつねは、ふたりで、風のおばあさんをさがしてあるきました。おばあさんは、一本の葉のおちつくした木立の下にすわっていたので、すぐに見つけました。「おばあさん、おどりの仲間にはいつて、手風琴をひいてくださいませんか。」

というと、おばあさんは、喜んで、承知してくれました。

きつねは、ほかに、わかい、美しい女たちが仲間にはいつたら、どんなにか、にぎやか

だらうと思つた。そうすれば、自分たちの舞踏も、人間にまけるものでないと考えたか
ら、

「おばあさん、もつと、私たちのほかに、わかい、美しい女たちはないものでしょうか。」
と聞きました。なんといつても、おばあさんは、島のすみから、すみまで知らないところ
はなく、それに年寄りに似ず、さとりが早いから、ないものでもないと思われました。

おばあさんは、木の下にすわつたままで、

「それなら、私が、雪女をよんできてあげましょう。また今夜あたり、人魚が、岩
の上にはいないものでもない。いたら、人魚も、つれてきてあげましょう。」と、いった
のでありました。

この北方の島の真夜中に、白い雪の平野で、すばらしい舞踏会がひらかれたのです。
ふくろうが唄をうたい、風のおばあさんがこわれた手風琴をならし、きつねを先頭に、
雪女、人魚というじゆんに、思い、思いに、手をふり、からだをまげて、おどつた
のであります。雪女の白い歯、水晶のような瞳からはなつ光と、人魚のかんむ
りや、首にかけた海中のめずらしい貝や、さんご樹のかざりからながれるかがやきは、
人間の指輪についている宝石の光の類ではなかつたのでした。

「ああ、のどがかわいた。」と、ふくろうがいました。

「ああ、腹がすいた。」と、きつねがいました。

しかし、そこには、酒も、果物も、その他の食べものもなかったのです。このつぎの時分には、人魚が海から食べるものをたくさん用意してくるといいました。そして、風のおばあさんは酒を、きつねは、森や、林から、なんとかして木の実を集めてもってくるいいました。その舞踏会は、いつのことでありましょう。やがて、みんなは解散しました。空の星と、木立とここに集まったもの以外に、この舞踏会を知っているものはありません。それは、海の波もこおりそうな、寒い、寒い、夜のできごとでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集 3」丸善

1928（昭和3）年7月

※表題は底本では、「雪《ゆき》の上《うえ》の舞踏《ぶどう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2018年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の上の舞踏

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>